

のあたり見聞しける宗匠家といふ分三十人ばかりもありぬべし、その中に、鈴木宗川、久田宗溪、同弟宗參、鈴木知足庵、速見宗達、この五家ほど事實式禮等に精しく、茶手前もよく、茶の湯も上手にて、并に詩歌の風流にもわたりし人は見當らず、この餘にもありぬべし、予がまれる人の内ばかりをいふ、

## 作意

〔茶譜一〕千宗易、泉州堺ノ町ニ住居、侘ノ比ヨリ茶ノ道不懈玩ブ、然ニ其時代ニ紹鷗ハ茶湯者ト云テ、世ノ人甚用テ師トス、或時紹鷗ハ宗易住所邊ヲ通、折節門前ニ水ヲ打掃除奇麗ニ嗜テ住者有紹鷗立寄テ亭主ノ名ヲ尋シニ千與四郎ト云、則呼出テ知人ニ成、今朝他へ先約無之バ、此庭ノ槿ヲ見テ茶湯ニ可逢モノ残念也、明朝必可參、茶ヲ振舞玉ヘト約束シテ歸與四郎悦、翌朝紹鷗來ヲ待、紹鷗不違契約ヲシテ與四郎宅へ行路地口ノ戸ヲ開テ見ルニ、前日ノ槿一莖モ無之、紹鷗思玉フ、近比野人ナル亭主ニ出合、槿マデ空スルコト残念ト、腹立シテ可歸ト思ヘドモ、立歸テ座敷ヘ入テ床ノ中ヲ見レバ、釣花入ニ槿只一輪有紹鷗見之、自最前ノ我心ヲ耻テ、庭ニ一本モ無之ハ尤ナリ、我ニハ幾計増與四郎ト感入テ、之ヨリ猶因深成ト也、其後愈天下ニ崇敬セラレ、宗易ト云シナリ、又紫野大徳寺門前ニ菴室ヲ造、堺ヨリ折々來テ聚光院笑嶺和尚ノ參下ニ成テ、利休居士ヲ受、此菴室ヲ不審菴ト云、四疊半ヲ造テ茶ヲ玩ブ、

〔茶話指月集上〕一宗易庭に牽牛花みごとに咲たるよし、太閤に申上る人有、されば御覽せんとて、朝の茶湯に渡御ありしに、朝がほ庭に一枝もなし、尤無興におぼしめす、扱小座敷へ御入あれば、色あざやかなる一輪床に生たり、太閤を初メ、召れられし人々、目さむる心ちし給ひ、甚々御褒美にあづかる、是を世に利休があさがほの茶湯と申傳ふ、

〔備前老人物語〕筑紫にて關白秀次、小倉の色紙をもとめ得給ひ、御座敷をあらため、色紙をひらきの御會あり、利休を上客として、相伴に三人あり、比は四月廿一日餘、曉がたのころなりしに、風呂